

『雲母集』論

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西山, 春文 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/5020 |

『雲母集』論

西山春文

一、はじめに

北原白秋の第二歌集『雲母集』（大正四年八月十二日刊）は問題の多い歌集である。白秋はその刊行時に、「此の雲母集一巻は純然たる三崎歌集である。而してこれらの歌が全く自分のものであり、私の信念が又、真実に自分の心の底から燦めき出したものに相違ないといふ事は、自分ながらただただ難有く感謝してゐる。自分を救ふものは矢張自分自身である。」（『雲母集余言』）と、「自分」という一語を多用しつつその歌集への思い入れを表明しているのに対し、第三歌集『雀の卵』（大正十年八月二十三日刊）の「大序」では、「恥を云ふと、私は『雲母集』で失敗した。」と明言している。いずれも作者の言葉として傾聴に値するものであるが、今もって『雲母集』の評価が一定しない理由の一端もここにあると思われる。つまり、『雲母集』の作品は厳然として存在するにもかかわらず、常に作者白秋の表面的な言葉に左右されつつ扱ってきたために、流動的な評価しか与えることができなかつたのである。そこで本論では、改めて『雲母集』とその周辺事項を整理、検討してみたい。そうすることによって少しでも『雲母集』の本質に近づくことができれば幸いである。

二、『雲母集』 発刊直後の批評とその問題点

『雲母集』の問題点を明らかにするためにも当時から現在までの批評文のうち、その代表的なものについて検討してみたい。まず、同時代評をピックアップしてみよう。

1、しげし「新刊批評」(『三田文学』大正四年九月)

短歌集である。これは白秋氏が嘗て三浦三崎に數ヶ月の新しき生活を營みし折の所産である。新生、流離抄、三崎新居、雲母雲、海山經、自然靜觀、地面と野菜、深夜抄、臨海秋景、法悦三品、閻魔の反射、見桃寺抄、これ等の各章に收められたる短歌數十、何れもみな著者の鋭敏なる詩的感興から湧き出たものであるが、近來に至つて其感興は單なる感興でなくなつてそのうちに一道の信念を交へ、また悲哀憂悶の途をたどつて歡喜法悦の境を脗ろげながらも認め、平凡微細の片影にも何物か無邊の宇宙の象がひそんでゐることを悟り得たかのやうに思われる。詩形また以前とは餘程ちがつて詠嘆の調を脱し飄逸の趣を示して來た。今日のわれと明日のわれとは自ら異なるところなかるべからず、白秋氏^{くわ}失れ自重せよ。

最も早くに執筆された批評であると思われる。文中「一道の信念」「悲哀憂悶」「法悦」などの評語は「雲母集余言」の白秋の言葉に拠るところ大であり、このことは読者が作者の言葉や実生活を第一に念頭に置き作品を解していたことを物語るものである。一方、後半の「詠嘆の調を脱し飄逸の趣を示して來た」という指摘は、前著『真珠抄』(大正三年

九月一日刊)及び『白金之独楽』(大正三年十二月十八日刊)と比較しての言であるが、評者は白秋の歌いぶりの変化をマイナスと捉えている点、注目すべきであろう。もちろんこの時点ではまだ白秋の以後の文学的広がりとその成果を予測することは難しかったはずである。

2、橋本東聲「肉體の藝術——雲母集を讀みて——」(『讀賣新聞』大正四年九月二十六日)

作者の健康と幸福が現はれてゐる。身體中が眼を開いてゐる。實感に根ざした生命の力がある。單なる感覺の描寫でない。氏の藝術に肉體の健康と歡喜の漸く擴大し來つたことは注目に値する。(中略)

氏の歌には一種の快的フォームル「Lustigerhumor」がある。柔かさと心やすさとから來る快的な諧謔味がある。これが氏の歌に光明的な色彩を與へてゐる。赤ん坊のやうに純一にしてうぶな所もある。(中略)

又氏は時に其技巧の妙に囚へられて高等な言葉の遊戯をしているやうな調子で歌をよんでゐる。巧みに過ぎて手應へのないこともある。巧みなのは結構であるが、巧みであればだけ、それに伴ふ上りの感を掩ひ隠すだけのより高い、より大きな或物を背景として居なければならぬ。この用意が無い爲めに氏の作品には人に迫るやうな生力と深みがない。

「肉體の藝術」という表題が示す通り、何よりもまず白秋の「健康と歡喜」という点にウエイトを置いた評である。

もちろんこれは「桐の花」(大正二年一月二十五日刊)の「哀傷篇」以來失われ、他ならぬ白秋自身が第一に欲していたところのものであり、その回復と『雲母集』の作品が密接な関係にあることは間違いない。よつて「實感に根ざした生命の力がある」ということになるのであろうが、しかし一方で評者は「技巧の妙に囚へられ」「人に迫るやうな生力と

深みがない」とも記している。この相矛盾するような評言にも既に、『雲母集』所収の歌の複雑性が露呈していると言えるよう。また、白秋の作品の一特徴となつてゆく「快的な諧謔味」「高等な言葉の遊戯」が指摘されているが、ここでは必ずしも全肯定されているとはいひ難い。前出「三田文学」掲載のしげしの「飘逸の趣」に対するマイナス評価と共通するものがあるろう。

3、赤木桁平「『雲母集』を読む」(『ARS』大正四年十月)

初めて内的醒覺の道途に立つた氏は、先づその藝術の裡に漲る「力」の充溢を欲した。

煌々と光りて動く山ひとつ押し傾けて來る力は、

盤石に押し伏せられし薔薇の花石をはねのけ照深みかも、

そしてその欲求はある程度までこの「雲母集」に於て實現されてゐる。けれどもその「力」たるや、表層的、觀念的な生命の緊張に止まり、未だ生命のどん底から滲み出るコンクリートな強壓の放射に乏しいやうな憾みがある。それには勿論いろいろな原因があらう。殊に氏が詩人としての素質が南方的、温和的であり、且つ享樂的、情調的である點はその主要なる内因であるが、これ以外に猶有力なる外因として擧ぐべきものは、氏の極度に彫琢されたる技巧の餘殃である。(中略)

「雲母集」一卷の印象を約めて云ふと、先づ清澄透徹といふ趣である。尤も作者自身の覗つた境地も其處にあるらしいが、その清澄透徹には猶ほ幾分の混濁と不純とが無いではない。その意味に於て前著「桐の花」よりも稍完成味の稀薄な感じがする。これは恐らく作者自身の内的醒覺が、猶ほ道途の半ばに位してゐるからであらうと思ふ。

「未だ生命のどん底から滲み出るコンクリートな強壓の放射に乏しいやうな憾みがある。」という評言と、その原因の一つを「極度に彫琢されたる技巧の餘殃」に見出し出している点は、前出の橋本東聲の評に呼応するものであり、当時の大方の見方はここに集約されるものであつたと思われる。また、この赤木評は白秋の要請により執筆されたものであることも考慮せねばならないが（1）、「氏が自然を凝視し、その凝視から味得し來つた萬象の藝術的再現には、氏の感覺と氏の氣分とのみが捕へうる氏獨特の境地がある。それは珊々たる響と、玲瓏たる光とに包まれた境地である。」として、ある種の写生の歌として高く評価している点にも目をとめておきたい。

4、室生犀星（『アララギ』大正四年十月）

曾つて「白金之獨樂」に於て私は著者に躍り過ぎると言つた心持ちを明かしたことがある。これ等のものが雲母集の卷の上^{はじ}め（最近）に於てしつとりとして來てゐる。

大きな這ひ下り松の枝の上漣かがやき鳥ひとつゐる

これだけ緻密で錯然した景情をそのまゝに恰然寫眞版のやうに撮つてしまつてゐる。出来るだけ叮嚀に注意した視力と聽覺とが、まんまと其完成期の熟した或物を著者に與へた。（中略）

「網の目に閻浮提金の佛ゐて光りかやく秋の夕ぐれ」の一首よりも

兩の掌に輝りてこぼる、魚のかず掬へども掬へどもまた輝りこぼる、

の方がどの位私に尊いか判らない。うそと實際と、幻惑と、現實とむろん私は後者に組する。實際秋の夕暮れの寂しき佛教的な季節の感應はさこそあるかも知れぬが、それだけのものではあるまいか。ちやうど寺寶なぞに見る軸物の尊さ（非精神的な）位の低度であらうと思ふ。（中略）

北原白秋は立派に完成されてゐる。これ以上私だちの目をデングリ返すことはない。無くともいい。とにかく北原白秋が完成されたことは事實である。彼れが永い三崎滞留集の終りに「相摸のや三浦三崎の事思へばけふも涙のながれながれる」と言つて寂しさを顧みて頁が終つてゐる。

ここでの犀星の評価は専ら「視力と聴覺」を生かした写生法と抑制の効いた表現に向かつており、従つて、現実から遊離したところの印象表現を厳しく非難している。だがこのことは、「雲母集」で白秋が企図した宗教的法悦感の一部を否定することにもなる。つまり、犀星が触れている「白金之獨樂」所収の作品や「網の目に」の歌は仏教的なるものに仮託した表現であり、実感に根ざしていないという点で「うそ」であり「幻惑」であるため、その法悦感も架空のものであり、よつて否定さるべきものということになるのである。一方、犀星が最後に触れている「寂しさ」は「雲母集」の大きな要素の一つであり、詩人犀星のこの着目は的を得たもので、無視することのできないものである。

5、釈道空「雲母集細見(上)」「アララギ」大正四年十二月

卯三首(2)

この連作には、感激は明かに見えてゐるが、それを觀照することの足りなかつた爲に、著しく思はせぶりを發揮してゐる。そこに糊塗があり、野狐禪が見える。「急須と茶碗十首」(3)の静かな客觀は、こゝには見られない。餘りに歡喜に溺れすぎてゐる。これを救ふには、客觀するに非ずば、何處までも其の喜びを推し進めて行くべきであつたのだ。白秋氏自ら悟らぬ遊戯が漲つてゐる。其の中、「大きな手があらはれて」(4)の歌は、兎に角も、或恐怖を暗示してゐるが、其のおほまかな韻律が裏ぎつてゐる。(中略)

片岡に粟と豆とが赤ちやけて深くさ、やく熟れにけるかも

赤き日の光の中にころげ出て恍れたる豆が聲断えてゐる

穀物の心に没入し同化してゐるところが及び難い。ひそかに或はしみぐなど、せないで深くとしたところに、白秋氏の無碍不退轉の注意力が見られる。赤ちやけても野趣を一首全體に與へてゐる。後の歌では静かな天地や人間が明かに背景に見える。聲断えてゐるは何物にも換えることの出来ない句である。

迢空はあくまでも作品に即し、短歌としての言葉使いや作者の姿勢とその功罪についてかなり細かい、そして厳しい批評を行なっている。そしてその際の指標は、いかに対象を（場合によっては自己をも）客観的・具象的に写生することができるか、というところに置かれている。この指標に従えば、赤木桁平の「自然を粉本にしてその一點一劃を忠実に模寫するといふ意味の写生ではない。むしろ自然の精髓を自己の心境に移し植ゑて、これに或種の化醇と改造とを與へ、以て『第二の自然』を創造するといふ意味の写生である。」という見地からの評価とは正反対の結果が出てきてもおかしくはあるまい。実際、釈はほとんどの歌に対して「餘りに歡喜に溺れすぎている」という意味の評を下し、さらなる觀照の必要性を主張している。ただ、数は少ないが高い評価を与えた歌もあるにはあるが、いずれも作者白秋の呼吸が直接には感じることのできない、冷静な客観写生によって作歌されたものばかりである。

以上、『雲母集』発刊直後の批評を五人の言葉に代表させて見てきたわけだが、これだけでも『雲母集』のおおよその性格と問題点が浮かび上がってきたと言えよう。第一に、写生歌としての作品と、生地のままの感情を定着させた作品とが混在していること。第二に、技巧的な作品も多く、場合によってはその技巧が作品を希薄なものにしていること。

第三に、それまでの作品とあまりにも作風が異なり、読者によってその点での是非が分かれること。大雑把に集約すれ

ばこの三点となろう。それでは、その後の白秋の創作活動を踏まえた上での批評はどのような形で成されてきたのかを次に見ておこう。

三、その後の『雲母集』批評

1、木俣修「『雲母集』序説」(『多磨』昭和十年十月)

これらの歌から感じられるものは、芭蕉的な閑寂であり、南畫的な簡素であらう。このことはすでに齋藤茂吉が「北原白秋選集」(アルス版)の序に於て述べてゐることである。かくて白秋が冀求し沈潜せんとした法悦境の一方、向は實にこの東洋的な寂び細みの境地であり、そこに落付かうとしたのである。この境地こそ、まさしく「雲母集」が到達した究極のものであらねばならない。即ち「雲母集」はあらゆる雑多なものを通り抜け通り抜けしてこゝに簡素、樸淨の觀照的な歌風を樹立したのである。この到達點は、言ふまでもなく、また、次の第三歌集への出發點ともなつて更に展開して行くのである。即ちこの境界は「雀の卵」に直接手をつなぐ重要な契機をなすものなのである。

木俣は「簡素、樸淨の觀照的な歌風を樹立した」記念碑として『雲母集』を評価している。つまり、『雀の卵』以降の白秋短歌の源流としての意味をここに見い出しているのであるが、「白秋が冀求し沈潜せんとした法悦境の一方、向は實にこの東洋的な寂び細みの境地であり、そこに落付かうとした」という言葉が出てくるのも、やはりその後の白秋の創作活動を身近に見聞したことによるものであつて、『雲母集』一巻の純粹な絶対評価としてはありえない言葉である。木俣はこのあとに続いて「『雲母集』鑑賞」(『多磨』昭和十年十一月、十二月)を発表しているが、例歌として取り上げている作品はやはり「觀照的」なものばかりであり、感情や技巧に勝る歌は意識的に排除しているように思われ

る。しかしそれでも、白秋の詩歌史の上に『雲母集』を、「到達點」であると同時に「出發點」でもあったという位置付けを行ったことは、白秋門下の一歌人の言として見逃すにはあまりにも重要な新しい問題提起であった。

2、吉田清一「日光四章（近代名詩鑑賞）」（『國文学 解釋と鑑賞』昭和二十四年七月）

私は「雲母集」の歌、「眞珠抄」「白金ノ獨樂」を、白秋の全詩作中で採らない。それらにはたしかに言葉のみが浮き、内面的な深さが不足してゐる。しかもこの種の風體と詩心は、内面的な深さこそ第一の要件なのである。風俗詩人、即興詩人としての白秋の特技である巧緻な表現力、豊富な語彙は、ここでは却つてあらずもがなの感がある。（中略）白秋の注意がより多く形式、技巧の面に注がれ、深い沈潜と、法悦の實感を伴わず、従つて、感情、感覺の誇大に傾いてゐるやうな印象を、全く消してゐないのである。

右の引用は白秋の三浦三崎時代に制作された作品の特質を、詩法と語句の典拠という面から考察した上での吉田の結論である。ポイントを鋭く突いた論文であり、過去に出されていた、技巧に走り過ぎて作品を希薄にしているという印象批評を実証してみせたものでもある。ただここで一つ残される問題は、何故に当時の「白秋の注意がより多く形式、技巧の面に注がれ」ていたかということであり、この問題は、評価の違いこそあれ前出の木俣が触れた白秋詩歌史の上での問題と接点を持つものであるに違いない。

3、中山礼治「北原白秋―歌とところ・上巻」（片山貞美・田谷鋭との共著、昭和五十五年五月、有斐閣新書）

「定かならぬ影より影を追ふ微光の中の蜨蝶」^{しじみちよう}（『桐の花』翻刻新版あとがき）の「桐の花世界」は一変し、「雲母

集』の白秋は、「物に直面しその生命に徹る」、少なくともそう志向する。明るい光の下で物がその有様を強調する三崎の自然が、あずかって力のあったことはいうまでもない。当時の白秋は、大きな挫折の後で、浮かび上がろうとするに専らであり、そこに仏教的な誘因が加わるので、物に直面し生命に徹るといつても、おのずから雲母集的な偏倚は免れないが、とにもかくにも白秋が、三崎の生活を通して新生面を開いたことは確かであり、それが白秋のいう「新生」と「法悦」と幾分ずれながら大部分の所で重なり合うことは認められる。

その道程は、集の作品を仔細に読むことによつて知るほかないが、その芯を貫くものを一口にいえば「寂しさ」である。

第一歌集『桐の花』から第二歌集『雲母集』への変調。そこを当代の評者達が攻撃したことは既に見てきた通りだが、同じ問題点を中山は後代の一読者として冷静に解説している。

『雲母集』で白秋のめざした「新生」は確かに実現されている。だが、その際の「新生」とは恋愛事件による挫折からの立ち直りと創作活動の再開の意味であり、必ずしもそれがすぐに作歌に反映されるとは考え難い。そこで白秋の頼りとしたのが仏教的な法悦感であり、表現上の技巧であつたと考えられる。よつて、短歌作品としては必ずしも完成されたものではなく、評価の分かれ目をも生み出すことになつたのである。この点を中山は「雲母集的な偏倚」、「白秋のいう『新生』と『法悦』と幾分ずれながら」という言葉を用いて記しているのである。

もう一点、この論で重要なことは『雲母集』の芯を「寂しさ」に見出していることである。最も早くには室生犀星が触れたところであり、西本秋夫も、「寂しさに秋成が書読みさして庭に出でたり白菊の花」の歌を取上げ、「白秋の代表作であり、名歌として有名な歌である。有名すぎて読みながしてしまつたためか、この歌の『寂しさ』を深く追求したも

のを寡分にして知らない。／いままであげてきた例歌から想像するだけでも、ここには数か月後に直面しなければならぬ別離の運命が、このとき、すでにどちらからともなく兆しはじめていてそれを覚悟しなければならぬ心境にいたのではないか。白秋には無量の感慨をこめた「寂しさに」であつたとおもう。「白秋論資料考」昭和四十九年三月、大原新生社」という鑑賞を行っているが、中山はもつと積極的に『雲母集』全体の芯を「寂しさ」であるとしているのである。心に留めておくべき見解であろう。

4、島田修二『短歌シリーズ・人と作品・北原白秋』（田谷鋭との共著、昭和五十七年五月、桜楓社）

『桐の花』から大きく変るのは、内容だけではない。文体もまた、顕著に変化がある。「けるかも」というような古風な用法の現れたことは前述の通りだが、さまざまな短歌の表現様式の模索がみられることも見逃しがたい。たとえば初句を「ある時は」で統一した十二首、「相模のや」でそろえた「三崎遺抄」六首などははっきりした例だが、初句を共通にした二首、三首の連歌は数知れぬほどあり、歌のスタイルを作り出そうとしていたことがうかがわれる。

『桐の花』に詩的要素があるのに反して、『雲母集』には短歌としての形に整ってゆく過程がはっきりしている。読者は、いかにも短歌を読んでいる、という安堵感を覚えるであろう。その一首一首が、白秋特有のすぐれた言語感覚によって磨かれているので、言葉のはたらきによって陶醉させられる。『雲母集』は言ってみれば、白秋における短歌形式の確立の軌跡であり、その後の白秋歌風の展開をみると、ここから新しい出発があつたと考えられる。

5、島田修二「北原白秋5・全詩業の主軸」（『花神』昭和六十三年十月、花神社）

持論をもう一度押し出すことになるが、『雲母集』のすぐれたところを、もう一度確認しておきたい。この集は釈迢

空などの批判があり、何よりも白秋自身が失敗を認めているのだが、その理由を明らかにしながら、それにも拘らず、これが白秋短歌の系列の中できわめて重要な転回点にあること、すぐれた作品が多く見られることを言っておきたい。

右の二編はいずれも、白秋門の歌人の筆による、最も新しい論の一つである。ここで初めて本格的に、白秋の全詩業を射程に入れた上での『雲母集』の表現様式について言及がなされ始めたといつてよいであろう。島田は、『雲母集』で示された様々な表現スタイルを白秋の意識的な営為として好意的に読み取ろうとしている。その点では同時代評に対するアンチテーゼと言えるかも知れない。だが、白秋の晩年の創作活動の中心が短歌であったことを考えると、「短歌としての形に整ってゆく過程がはっきりしている」という歌人の見方、「短歌形式の確立の軌跡」・「きわめて重要な転回点」という規定を充分に考慮する必要がある。

これまで、同時代評及びその後の評を概観してきたわけだが、当代に問題とされた、作品内容・技巧・歌風の変化という三点はその後必ずしも解決したとは言いがたい。しかし、白秋の全創作活動を念頭に置くことによって、『雲母集』の新たな意味が見い出されてきたことも間違いないことである。それではもう一度『雲母集』自体に立ち返って検討してみよう。

四、作品に即して

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕（『桐の花』）

煌々と光りて動く山ひとつ押し傾けて来る力はも（『雲母集』）

薄野に白くかほそく立つ煙あはれなれども消すよしもなし（『雀の卵』）

右の三首は『雲母集』を含むその前後三歌集の巻頭歌である。巻頭歌のみで一冊の歌集を論じるわけにはいかないが、当歌集の性質・方向性を暗示する代表歌として取り上げることが許されよう。

「春の鳥」の歌は過去に様々な論議を呼び起こした一首であるが、ここに捉えられているものは、「私の歌にも欲するところは気分である、陰影である、なつかしい情調の吐息である。……」（『桐の花とカステラ』）と白秋自身が記している通り、定かならぬ情感とそれを取り巻く雰囲気であることは間違いないだろう。また、当時の白秋にとつての短歌は、「私の詩が色彩の強い印象派の油絵ならば私の歌はその裏面にかすかに動いてゐるテレピン油のしめりであらねばならぬ。」という言葉が示すように、詩の裏がわにあつて淡い情感を盛り込む器の役目を果たしていた。ちなみに、「春の鳥」の歌と同一モチーフによる詩として次の作品が発表されている。

春の鳥

鳴きそな鳴きそ春の鳥、

昇菊の紺と銀との肩ぎぬに。

鳴きそな鳴きそ春の鳥、

歌沢うたざわの夏のあはれとなりぬべき

大川の金きんと青とのたそがれに。

鳴きそな鳴きそ春の鳥。（『東京景物詩及其他』のち『雪と花火』に改題）

この二作品からも、個別作品の優劣は別として、白秋の考えていた詩と短歌は表裏の関係にあつたことは明らかである。ところが、「煌々くわくわくと」の歌になるとはや情感・雰囲気の淡々しい表現ではない。かといつてももちろん単なる虚構や

写生でもない。作者の願望とイマジネーションが生み出す詩的眞実の世界である。また、この時期の著作は少なく、短唱集『眞珠抄』・『白金之独楽』があるものの、詩（狭義の）にはほとんど手を染めていない。表裏の關係にあつたはずの詩と短歌の位置が崩れかけている時期として注目に値しよう。

「薄野うすの」の歌になると、読者の脳裏に、ある明確な対象を描き出さずにはおかない。しかも作者はその裏側にひっそりと息をひそめている。白秋自身の言葉を借りるならば、「渋く寂しくなりまさる私の観想の中に、再び忘れられてゐたあの『桐の花』の明るさが目に立つて還つて来たやうなけはひがする。それも明るい乍ら以前の明るさは違つた渋さを見せて、再び私を訪づれて来た。」（『雀の卵』「大序」）という状態が、確実に歌に反映されたものと言えるだろう。また、この歌集『雀の卵』は約八年かけて完成させたものだが、その間、短歌制作から離れる時期がある一方で、民謡や童謡の制作に手を広げる時期があつたりするなど、白秋の内における短歌の位置が大きく変動していることが認められる。

右に見てきたように、この三首の歌風と当期の短歌の位置は明らかに変遷を見せている。そしてその歌風と短歌に対する考え方は巻頭歌のみならず各々の歌集を貫く歌風の変遷にもつながっている。その歌いぶりを敢えて図式的に示すならば、内面的情調から外面的志向へ、そして観照へということになる。これを考えると当時の評者達が、「今日のわれと明日のわれとは自ら異なるところなからず」（しげし）と言ひ、「これ以上私だちの目をデングリ返すことはない。」（犀星）と述べていることと、現代の評者達が白秋の全創作活動を踏まえた上での『雲母集』評価に向かおうとしていることはいずれも同一ポイントに対する提言であることが理解されるのである。いずれにせよ、『雲母集』は、白秋のこのめまぐるしい動揺の軌跡の道半ばに位置していることは間違いない。

ところが、複雑なのは内面ばかりではなく、『雲母集』自体の構成も錯綜している。白秋自身は次のように書き記して

いる。

此三崎生活の内容に就ては作品が凡てを証明すると思ふ故、これ以外に何も言はぬ。只初めは小児にやうに歡喜に燃えてゐた心が次第に四方鬱悶の苦しみとなり、遂に豁然として一脈の法悦味を感じ得たと信ずるそれ迄の道程は、本集に於て初めより終まで殆正しい系統を追つて、順序よく採録されてある。それを見て頂けば何よりである。「雲母集余言」

當時に於ては、何ひとつ読みもしなければ、又殆ど創作をする暇も無かつたと云つていい。ただ異人館時代に於て真珠抄の短唱数十首と、見桃寺に移つてから山海経、地面と野菜、閻魔の反射、法悦三品中の、それぞれその一部だけを得たのみである。その他は小笠原島や東京に帰つてから、幸に感興の再現を得て、筆を執つたものである。それではこれらの歌風に就ても非常に複雑してゐる。これだけは承知していただきたい。尚、此の三崎新居以前事情があつて、十日ばかり同処へ逗留してゐた事がある。「流離抄」の一篇はその時の歌である。(同右)

これらは一見すると矛盾する内容であるように思われる。特に、「道程は、本集に於て初めより終まで殆正しい系統を追つて、順序よく採録されてある。」という作品の構成順序に関わる言葉と、「歌風に就ても非常に複雑してゐる。これだけは承知していただきたい。」という歌の成立に関する言葉は非常に微妙な関係にあるのではないだろうか。

「本集は大正二年五月より三年二月に至る、相州三浦三崎に於ける私のささやかな生活の所産である。」(「雲母集余言」)ことに間違ひはないが、これは歌のモチーフを主にこの数十ヶ月の生活の中に見い出したという意味である。集中作

品の最も早い初出として、

寂しさに浜へ出て見れば波ばかりうねりくねりあきらめられず

来て見ればけふもかがやくしろがねの沖辺はるかにゆく蒸汽のあり

日が照る海がかがやく鱗船板子たたけりあきらめられず（『朱樂』大正二年二月一日）

を初めとする十首が認められること、逆に最も遅い初出として

かきわくるひと足ごとに竜胆が光りこぼる冬の朝明

犬を連れてゆけば涙もとどまらずそこにも竜胆ここにも竜胆

そこにもここにもあはれな小さい竜胆が咲いて居る光りてをののいてる（5）（『日本勸業銀行月報』大正四年八

月）

を初めとする十二首が認められることから想定すると、実際に『雲母集』収録歌が制作・改変されたのは、大正二年一月（6）から刊行直前の大正四年七月頃迄（7）と考えられる。ところが、この間の作品が制作順に配列されているわけではない。例えば、巻頭の「新生 序歌」の章に収めされた十九首のうちの十二首は大正四年七月と八月の『ARS』誌上に掲載されたものであるのに対し、第二の章である「流離抄」の三十四首のうちの二十首は大正二年二月と四月の『朱樂』に初出を見い出すことのできるものである。この二章の初出發表時期を考えると、「道程は、初めより終まで正しい系統を追つて、順序よく採録されてある。」という言葉を作品の制作順序という意味で捉えてはならないことは明白であり、この点についての過去の指摘も首肯されよう。だとするならば、文字通りに三浦三崎における地理的・時間的な「道程」（ただし、「小笠原や東京に帰つてから、幸いに感興の再現を得て筆を執つたもの」も多いことを考えると心理的な「道程」という側面も混入していようが。）に従つて編成されたと考えるのが最も妥当かも知れない。しかし、

白秋自身の言葉を借りるならば、「小児にやうに歓喜に燃えてゐた」はずの時期に相当する「三崎新居」の章に収められた歌はどのように解釈すればよいのだろうか。

ある時は眼まなこひきあけ驚くと鮮あざやかなる薔薇ばらの花買ひにけり（8）

ある時は大地だいちの匂ふんぷんとにほふキヤベツの玉もぎて居り

右の二首は連作「ある時は」中のものであり、一般に言われてきたうらかな思想の歌、歓喜の歌と言えるものである。ところが、同じ連作中の

ある時は小さき花瓶くわびんの側面かたづらにしみじみと日の飛び去るを見つ（9）

ある時はただ専念ひとひまに一匹の大鯛釣ると坐りたりけり

などの歌にうらかな要素、歓喜の心情を感じ取ることはできまい。いまは一つの例を掲げたに過ぎないが、「雲母集」全編を貫く性格の一つがここにある。「歓喜」、「苦しみ」、「法悦」の時期の作品いずれもが、ある程度は各々の方向性を示しながらもどうしてもそこへ没入し切れずに終わっている。一体何がそうさせているのだろうか。早くには犀星が触れ、その後西本秋夫、中山礼治が指摘した「寂しさ」。実は、白秋は『雲母集』時代において最後までこの寂しさから脱却することができなかつたのである。だから、いくら「歓喜」から「苦しみ」へ、そして「法悦」へと「正しい系統を追つて、順序よく採録されてある」と唱えても、読者は当惑しようし、評価の二極分裂が生じたとしても仕方あるまい。

では何故に初めから「寂しさ」の歌集としなかったのだろうか。この問題を考える場合、『雲母集』成立の事情と当時の白秋の生活状況に触れないわけにはゆくまい。

五、『雲母集』とその周辺

白秋にとって、『雲母集』の歌を制作した時期は苦難の時であった。三浦三崎行の目的も「ここへ越したのは世間を一時憚るのと、病気の療養を主にした事である。(10)」(大正二年六月十七日、山本鼎宛書簡)といったように、明治四十五年の恋愛事件に端を発する様々な紛糾状況と世人の注目から身を避けることが第一の目的の、いわば逃避行であった。彼はそこでの生活の様子を「このせつは非常に元氣にて毎日く／＼ポト漕ぎにていそがしく新聞も雑誌も読まず、たゞ自己独自の生活に閑なし、たゞのんきになつてしまひ申候」(大正二年六月と推定、志賀直哉宛書簡)と書き送っている。確かに、肉体的には健康であったようだが、「たゞのんき」にばかりもしていられない、重大な問題を二つ抱えることとなっている。第一は経済的な問題であり、第二は世間からの隔絶感と創作基盤の喪失という問題である。そこでこの二つの問題を縮小すべく選んだのが、新しい詩の創作であった。既製の文壇に依拠せずに読者を確保し、あくまでも筆一本で生活を立てようとする意図。そこから生まれたのが短唱集『真珠抄』であり、『白金之独楽』だった。(11)しかし、生活状況はなかなか好転しないというのが現実であった。

一方、大正二年十一月には「巡礼詩社」を創立、翌年九月に機関誌『地上巡礼』を創刊している。これだけの苦境にありながら結社を作り、機関誌を発刊するということは、並々ならぬ芸術的意欲に掻き立てられてのことと言えようが、裏側にもう一つの理由があつたことも見逃せない。

実は僕も色々に考えてゐるが、やはり「朱樂」を復活させるが一番近道のやうに思ふ。それから今度は思ひきつて、独自経営にして、白秋詩社といふのも起こしたら、生活がずつと安楽になれる、添削や繁忙な事務はつくぐイヤだが、生活のためとあれば仕方がない。とにかく社友―門弟―を募るのだ。会費はズツと高くして一ヶ月特別が壹円普通が五十銭、社友の作物は添削してやる、それから優秀なのは雑誌にのせる。歌では前田も若山もやつてゐるし、今度吉井までスバル詩社といふのはじめたが、僕のは詩と歌と両方だから確に会費は少く見つもり特別百人普通三百人はある。それ丈でも月収二百五十円になる。尤もそれから雑誌実費四百人だけ四十円さしひく。それでも二百十円にはなる。また別に雑誌の利益が五十円は出る見込みだから、月に二百六七十円はうまく取れさうに思ふがね。

それに詩集は自分の手で出版する、他に原稿をかくと、印税その他でも平均月に二十円位以上は別にはいる。僕がシツカリやりさえすれば、月に三百円にはなる。さうしたらお前のすきな預金とやらも出来るだらうが、僕よりお前の方が先きに死にさうだからその必要もあるまいな。

この計画は空論ではない。僕が決心さへすればやれる事なんだが、どうも詩の先生にはなりたくなくてね、とつおいつ考へてゐる。(大正二年八月七日、北原まり子「俊子」宛書簡)

捕らぬ狸の皮算用ではあるが、経済的基盤を安定させる手段として詩社の創立及び雑誌の刊行を企図していたことが右の書簡に明確に示されている。経済的な困窮の事情は「巡礼詩社」の社費にも現れている。創立時の社費は普通社友が一ヶ月六十銭と設定されているが、同時期の他の雑誌、例えば「アララギ」が二十銭、「詩歌」「白樺」が三十銭であったことを考えると、雑誌や社の方針が違ふとは言え、白秋の窮乏生活の実態と「巡礼詩社」にかける期待の大きさが見て取れよう。だが実際には、意に反して厳しい経営が続いたのである。後に彼は、「この時代は、社友六十人位よりや

つと後に百二十に至つた程度のもので、社費は集つてもさして収支償ふ訣のものでなかつた。出入が繁く多忙なばかりであつた。世の錯妄した評家はその時の私の芸術上の才能が枯渴したなどと詩史などに書いてゐるやうだが、それは一家の貧窮時代に於て、社の仕事もあり、詩作に熱中し能はぬ身動きのとれぬ状態に私はあつたのである。「〔短歌私史（別篇）〕」と述懐している。結局、途中で普通社費を値下げしたり、新会員を紹介するよう呼びかけるなどの方策を講じたが、雑誌は六冊のみの刊行に終わつてゐる。だが、この『地上巡礼』の廃刊（大正四年三月が最終刊）と同時に、再び新しい文芸雑誌『ARSI』を創刊（大正四年四月）してゐるのである。（12）この二冊の雑誌の廃刊・創刊の経緯についてはいまだ詳らかにされてゐないが、『真珠抄』等の著書、並びに大判の『地上巡礼』二冊などは、弟鉄雄が無月給の約で、その代りにその勤め先の金尾文淵堂から出版してもらつたほどであり、私たち兄弟二人が共同して、必死に一家の生計に當つたことである。内、一冊休刊したのは、文淵堂の金融事情から来てゐるのであつて、私等にはどうしようもなかつたのである。（中略）出版上の一切は弟の仕事として、文淵堂で始末がついたのである。「〔短歌私史（別篇）〕』という回想から考えると、出版費用の不足が原因で印刷所・取次所との間に確執が生じ（13）、とりあえず『地上巡礼』は廃刊とする一方、さらなる読者の拡大を企図して阿蘭陀書房の創立・『ARSI』の創刊（顧問は鷗外と上田敏）を実行に移したと思われるのである（14）。

『雲母集』の刊行はこういう苦境の中で行われている。その意味では、以後の歌集とは自ずから異なつた性格を有さざるを得ない一冊だつたといふことができよう。第一には、やはり多少なりとも金銭的潤いを期待する歌集であつたらうし、第二には、詩歌人としての足場の再興を希求しての歌集であつたはずである。（15）そう考へてくると、犀星が『雲母集』を評価しながらも、「網の目に閻浮堤金の佛みて光りかゞやく秋の夕ぐれ」の歌を暗に「うそ」であり「幻惑」であると非難したのも、赤木桁平が「幾分の混濁と不純とが無いではない」と指摘したのも、白秋の芸術的な純粹性に

右記の二つの邪念が流入していたことを見抜いていたからだと思われるのである。

白秋にとっての『雲母集』は、「自分を救ふものは矢張自分自身である」（『雲母集余言』）と巻末に語る通りに、自己救済の歌集であった。そうだとするならば、むしろ現実生活上の精神的・経済的な本音はできるだけ深く沈め、『真珠抄』・『白金之独楽』と同様に、自らを巡礼の徒になぞらえたところに浮かび上がる宗教的法悦感を前面に押し出し、過去の詩人白秋とは異なつた歌風の確立をアピールする必要があつたに違いない。「友人から嘯はれてこのまゝ消え入るやうな事はできない、どうにでも見返してやり度くおもつてゐる」という言葉にも示されるように、プライドの高い白秋ならば尚更のことであろう。

六、「雲母集」の本質とその意味

白秋の意図と、それに反するかのように『雲母集』を貫く主調旋律としての寂しさ。実はこの二面性こそが『雲母集』という歌集の本質である。つまり、後々まで高い評価を得ることとなつた「寂しさに秋成が書読みさして庭に出でたり白菊の花」のような、実感と表現とがしっくりとなじんでいる歌がある反面、無理にこの寂しさを沈めようとしたために、表現的にも内容的にも無理の生じた歌も錯綜しているのである。後の、「恥を云ふと、私は『雲母集』で失敗した。『桐の花』で完成したものを思ひきつて破壊してかかろうとした。あれは蛇皮を脱ぐの類で、一旦はあれ丈の自己革命をやつて見ないと収まらなかつたのである。で、活気活力のみで何も彼も無理押しに押し通そうとした。で、我身がのさばり、自然相が極端まで強調され、言葉が事実以上に飛躍し過ぎてゐた。」（『雀の卵大序』）という記述も、「私は思ひきり桐の花風を破壊した。全く變貌して了つた。すなはち一種の無暴とも見られる跳躍は、私に力と熱との藝術を熱望せしめた。麗明かぎりなき海光、日光、野菜、魚鱗の中に寧ろ放恣なほど或る種の法悦を歌はうとした。（中略）ただ、あ

まりに力と法悦とを意識し過ぎ、観念的光明狂信の風をも奔騰させた。」(『白秋詩歌集第三卷』後記、昭和十六年四月、河出書房)という回想も、この二面性に対する率直な自己評価として読んでこそ初めて首肯されるのである。

だが、『雲母集』は「失敗」だけをもたらしただけではなかった。言葉の「一種の無暴とも見られる跳躍」の中には、次のようなものも散見される。

天を見て膨れかがやく河豚の腹ぼんと張り切る昼ふかみかも

はろばろに枯木わくれば甘藷畑お魂げるやうな日が落ちて居る

相模のや三浦三崎は屁の神を赤き旗立て祭れるところ

これらの、寂しさの中に時折現れるユーモラスな情景の捉え方は、白秋の本然的な資質の一端を示唆するものであり、この時期の作品に初めて姿を現すものである。だが、ここで現れたユーモアという要素は以後の白秋文学(特に童謡や『フレップ・トリップ』等の詩文)に欠かすことのできない要素の一つとなっていく。

また、『雲母集』の作品を初出年代順に並べ変えた上で精読して初めて気が付くことが二つある。一点は、前半の作品は間違いなく「我見がのさばり、自然相が極端まで強調され」ているために、例えば、「豚小屋の上の棕櫚の木の裂葉より日は八方に輝きにけれ」(初出は大正二年十二月『白樺』)のように拡散的な表現傾向が強いが、後半の作品になるに従い、視点も表現も一点に凝縮されていくのが見てとれるということである。この凝視力の深まりは、「天の河棕櫚と棕櫚との間より幽かに白し闌けにけらしも」(初出は大正四年七月『ARSI』)等の作品に結び付き、さらには『雀の卵』以降の短歌につながっていくものと言えるだろう。もう一点は、凝視力が強まるのと並行して、歌い口が多様化している

ということである。

薔薇の木に薔薇の花咲くあなかしこ何の不思議もないけれどなも（初出は大正四年一月『地上巡礼』、その際は「薔薇の花薔薇の木に……」となっている。）

何じやとてそげなそしらぬふりをする急須こち向け日も暮るるぞよ（初出同右）

油壺から諸磯見ればまんまろな赤い夕日がいま落つるとこ（初出は大正四年八月『新日本』）

これらはもはや短歌としての表現スタイルではなく、民謡の一節として採るべきものだろう。実際に白秋は三崎時代より「城が島の雨」を初めとする多くの民謡にも手を広げていく。だがこれは、歌人として成熟していく方向性に逆行するものではなく、以後の短歌作品にこのような試行が見られないことから考えても、恐らく『雲母集』においての様々な試みを一旦整理し、それぞれに相応の各々のジャンルへと分岐させていったものと思われるのである。言うならば、『雲母集』時代は、本格歌人としての第一歩であると同時に、大衆詩人としての資質の開花期でもあったと言える。

以上考察してきたように、『雲母集』は白秋の三崎体験という尋常ならざる状況から生み出された、特別に多様な要素を有する歌集である。その意味ではやはり、木俣修・島田修二らが指摘した通り、白秋にとつての「新しい出発」点。「きわめて重要な転回点」に位置するものと言える。

注(1) 大正四年九月七日、赤木桁平宛白秋書簡に、「評論是非にもいたゞき度く御ねがひ申上候」という要請が、また同月二十四日の同書簡に「雲母集の御批評難有く拝受しました、無理強ひにしてすみません」という一節がある。

(2)

「卵」と題された次の三首を指す。

煌々と光りて深き巢のなかは卵ばかりつまりけるかも
大きな手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるかも
かなしきは春画の上にくるがれる七面鳥の卵なりけり

(3)

「急須と茶碗」と題された次の十首を指す。

日の光い照りかへせばくれなるに急須動きてしじに燃ゆるも
燃えあがる急須つらつらその息をそばの茶碗に薫しけるかも
急須燃えそしてまららに茶碗ゐるこの親しさの限り知られず
日ぐらし急須と茶碗とさしむかひ泣くが如しもその湯気立てば
ふつふつと小さき生物香を放つうつくしきかもまんまるな盆に
いついかに誰がさしよせし知らねども涙ぐましも茶碗と急須
急須燃え茶碗湯気ふくそれよりもなほ温かきなからひにして
思ひあまり急須と茶碗と人知れずそがひに廻り泣けるごとしも
何ぢやとてそげなそしらぬふりをする急須こち向け日も暮るるぞよ
盆の上に急須ありまた茶碗ゐるこの世界も安からなくに

(4)

「大きな手があらはれて昼深し上から卵をつかみけるかも」の歌を指す。

(5)

「雲母集」収録時にはそれぞれ

かきわくるひと足ごとに竜胆の光りまたたく冬のあさあけ

犬を連れてゆけばかはゆき小笠原そこにも竜胆ここにも竜胆

そこにもここにもあはれな小さな竜胆が咲いてゐる光つてまたたいてゐると改変されている。

(6)

白秋が一家を挙げて三浦三崎に転居したのは大正二年五月だが、同年一月にも単身三崎を訪れており、既にその折りから歌興を抱いていたことが見てとれよう。

(7)

大正四年七月二十日、池崎忠孝宛書簡に「小生只今雲母集編輯中」とあり、また同二十五日同書簡に「雲母集いま校正中です。」とあること、既に引用した「日本勸業銀行月報」掲載歌が「雲母集」では改変されていることから考えても、

刊行直前まで制作或いは修正していたことが見てとれる。

- (8) 初出形は「ある時は熱心に顔をかがやかし大きな薔薇をうかがひにけり」。
- (9) 初出形は「ある時は黒き花瓶の側面にしみじみと赤き日のさすを見つ」。
- (10) 病気というのは福島俊子の結核を指す。
- (11) 『真珠抄』の成立事情については、拙論「北原白秋論——『真珠抄』を中心に——」(『明治大学大学院紀要第26集文学篇』一九八九年二月、において既に考察したところである。)
- (12) 『地上巡礼』[ARS] 発刊の周辺事情については「北原白秋と『地上巡礼』[ARS] (上)」「同(下)」杉本邦子著(『学苑』昭和六十年一月及び八月)において綿密な考証が行われており、多くを御教示頂いた。
- (13) 『地上巡礼』の創刊号から五号までの奥付には「発行所 巡礼詩社、取次所 金尾文淵堂」とあるが、最終号のみ「金尾文淵堂」の名が消えている。同時に印刷所も、「三間印刷所」から「文祥堂印刷所」へと変わっている。また、当時期の書簡(大正四年三月、吉井勇宛)に、「○兄と二人の半折会やつては如何 ○金まうけの事いろく御相談したし。」と経済状態向上を願っての率直な言葉が語られている。
- (14) 『ARS』も全七冊を刊行しただけで廃刊に追い込まれた。この点について白秋は「このARSの廃刊は、書房の経営に一頓挫を来し、一に金融関係で、刀折れ矢尽きたのである。もともとから無理なのである」(『短歌私史(別篇)』)と振り返っている。
- (15) 大正二年八月十九日(推定)、馬場静浪宛書簡の言葉には、三崎滞在中の詩人としての白秋が世間を気に掛け、また焦慮している様子が表れている。「御手紙難有う、久し振りで拝見して非常に考へさせられました。此頃殆ど東京の誰一人からも通信が来ないので、自分がどういふ侮蔑と嘲笑を受けてゐるかといふ事も、自分の芸術的位置がどんなに淪落の底にあるかといふ事も全く解らなかつたので、尚更だつたのです。(中略)友人の書信のある意味ある一節半句の鋭さに遭遇すると殆ど火のやうに苦悶焦心の絶頂に燃え上るのです。(中略)僕の芸術も今復活せねばもう一生浮び上れないかとおもふ、一人でじつと考へると実に苦悶いふばかりでない、僕もまさか友人から嘖はれてこのまゝ消え入るやうな事はできない、どうにでも見返してやり度くおもつてゐるし、自信もある」

※ テキストは『白秋全集』(昭和五十九〜六十三年・岩波書店)に拠る。